

歴史と都市と



*山田晴利

鮮烈なデビュー作「アメリカ大都市の死と生」¹⁾の中で、J. ジェイコブスは近隣住区を批判して、「都市という混合物と町 (town) の生活との根本的な違いを認識する必要がある」と述べている。町では、そこに住む人々の結びつきは幾重にも交わり、まとまりのあるコミュニティがつけられるが、大都市ではこのような交わりはない、というのである。人口 5,000 人~10,000 人程度の町であれば、主要な通りに行けば知人、同級生などに会おうが、大都市の同程度の人口の住区では、そうしたことは期待できない。大都市の人々は、こうした小さな住区にとらわれずに都市全体を動き回っている。したがって、近隣住区という概念自体が無意味である。にもかかわらず、都市計画では近隣住区が幅をきかせており、都市計画家は大都市でも近隣住区論によって計画をたてている、というのがジェイコブスの批判である。

ジェイコブスによるこの批判を読んでみると、司馬遼太郎が老子のとなえた都市の理想像「小國寡民」(老子第 80 章

小國寡民。使有什伯之器而不用。使民重死而不遠徙。雖有舟輿無所乘之。雖有甲兵無所陳之。使人復結繩而用之。甘其食、美其服、安其居、樂其俗。鄰國相望鷄犬之聲相聞、民至老死、不相往來。)

に対して、「あまりに人間性を無視している」と批判していたことを思い出した。

しかしながら、二人の批判は現在の都市の姿を前提にしてのものであって、歴史が顧みられていないのではないだろうか、という疑問をぬぐいきることができない。

たとえば、「アメリカ大都市の死と生」を読んでいると、アメリカの大都市は有史以前から厳然としてそこに存在し、人々は都市内を自動車で動き回っていたかのような印象を受ける。また、「道の古い字形は、首を携えて進む形であり、... 識られざる神霊の支配する世界に入るためには、最

も強力な呪的力能によって、身を守ることが必要であった。そのためには、虜囚の首を携えて行くのである。道とは、その俘縛^{ふかく}の呪能によって導かれ、うち開かれるところの血路である」²⁾という説をきくと、道を歩くのも命がけであり、自分の町から外に出るのはかなりの覚悟を必要とするのではないか、と思える。

さて、岡田英弘³⁾によれば、文明には歴史のある文明と歴史のない文明とがある。歴史のある文明は、地中海文明と中国文明であり、それぞれヘロドトスが「ヒストリアイ」を著わし、司馬遷が「史記」を著わすことによって、歴史という文化をつくり出した。一方、歴史のない文明には、インド文明(輪廻・転生思想が基礎にあり、人間界のできごとだけを記録してみても歴史はなりたない)、イスラム文明(一瞬一瞬が神の創造にかかっており、未来は神の領域に属する; ただし、地中海文明の影響を受けて歴史をとり入れた)、そしてアメリカ文明がある。

アメリカ合州国は歴史とはかかわりなく憲法だけによってつくられた国であり、アメリカ文明には歴史という要素が欠けている。アメリカ独立以前に、アメリカをたばねる王がいたわけでもなく、何のまとまりもなかったところにつくられた国がアメリカであり、歴史と絶縁して出発した。このため、アメリカ人は現在がどうあるかということにしか関心がない、と岡田は述べる。アメリカでは、「歴史」ということばは「誰でも知っている話」ぐらいの意味しかもない。

まことに瞠目すべき指摘であり、このことを頭の片隅においておくと、「アメリカ大都市の死と生」を読んだ時の奇妙な違和感の根拠がかなりはつきりとしてくる。そして、ラスベガスのような虚構に満ちた都市がつくられた理由もここにあったのか、と気づかされる。ラスベガスにあるスフィンクス、エッフェル塔、サンマルコ広場と並んで、伊勢神宮や唐招提寺や清水寺があったら、いかに異様な印象をうけるかを想像してみたい

¹⁾国土交通省国土技術政策総合研究所高度情報化研究センター長

だきたい。

ひるがえって、日本はどうか。わが国は歴史のある文明である中国文明に対抗するために、歴史をもった。わが国において、歴史と都市とはどのように関わってきたらうか。屋根の瓦を軸に探ってみることにしよう。

上田篤⁴⁾によれば、わが国では飛鳥時代に屋根瓦が寺院建築に用いられるようになったが、庶民の住宅で屋根に瓦葺きが用いられるようになるのは、はるかに時代が下った18世紀初めである。この理由の一つに、寺院建築に用いられた本瓦は高価な上に重く、庶民の住宅でつかうのに適さなかったことがあげられている。瓦葺きの普及は軽くて安価な棧瓦の発明をまたなくてはならなかった。

しかしながら、上田はもう一つの重要な理由を指摘している。それは、戦国時代、城下町の家屋が城を守る側からも、城を攻める側からも、「たきぎ」としか見なされていなかった、ということである。攻城側は、町に火をかけて城を火攻めにする。一方、籠城側もこうした火攻めをさせないようにするためだけではなく、攻撃のための遮蔽物と雨露をしのぐ宿を敵に与えないために、自らの城下町に火を放つ。町が「たきぎ」としか見なされなかった、とはこのことである。支配者は火を放ったときよく燃えるように屋根瓦を禁じ、このため町中の家屋は金をかけない粗末なものとなった。

田舎の家屋は町中の家屋以上に粗末だった。明治初期に来日し、東京から北海道まで主に騎乗によって旅行した英国人イザベラ・バードの旅行記⁵⁾によれば、鬼怒川上流の藤原という宿場の宿は、雨がふれば雨もりがし、雨もりの水を避けるために、ベッドをあちらこちらへ移さなければならなかった。その上、部屋の中には多数の蚤がいて、安眠を妨げた。

瓦葺きの禁制が解かれるのは、城下町が軍事拠点から政治・経済の拠点へと変貌し、町民が富を蓄えるようになった享保年間のことである。これは、大火によって城下町が消失することを防ぐことが大きなねらいであった。寛政の大火のあとになると、焼跡には瓦屋根以外の建物が禁止されたという。瓦葺きによって、焼け出される心配も少なくなり、家屋の雨漏りもなくなったことから、文化文政時代になると、町民の文化が花開いた、とは上田の指摘である。

上田はいまひとつ重要なことを述べている。そ

れは、わが国では、堺のようなわずかな例外を別にすれば、自治権をもった都市がほとんど存在しなかったことである。堺が織田信長の武力に屈したように、わが国の都市は武士の城下町として統治機構にくみ込まれた。このため、都市の自治の伝統は絶え、後世に伝えられることはなかった。

現在の日本の都市は、ひとことでいってしまえば、惨憺たるありさまである。特に、バブル期には土地が投機の対象となり、地価は異常なまでに高騰した。都市を経済的な対象としか見なさず、経済価値のみによってしか評価しなかった結果、わが国の都市はおそろしいまでに荒廃してしまった。

こうした現実を前にすると、町を「たきぎ」としか見なさなかった中世の支配者の伝統が、わが国ではいまもって連綿と受け継がれてきているのではないか、と思わざるをえない。

これまでは都市を改変することに忙しく、安定した土地利用を生み出すことには必ずしも成功していない。人々が1時間以上もかけて満員電車で都心に通勤するという生活は、決して健全なものとはいえない。人が住み、生活する場所としての都市をつくりだすことがいま一番求められている。

最後に、J. ジェイコブスの「アメリカ大都市の死と生」から一節を引用して、自戒のことばとしたい。

自動車のニーズは単純で、都市の複雑なニーズに比べれば、理解することも満足させることも容易であり、ますます多くの数のプランナーそしてデザイナーが交通問題さえ解決すれば、都市の主要な問題は解決されたと考えるようになってきている。都市には、交通問題よりはるかに入りくんだ経済的、社会的な問題が存在する。都市そのものがどのように機能し、街路についてさらに何が必要なのかを知らずして、交通問題をどうあつかえばよいかを知ることができようか。できはしない。

参考文献

- 1) Jane Jacobs: *The Death and Life of Great American Cities*, Random House, 1961.
- 2) 白川静:『文字遣違』, 平凡社ライブラリー 46, 平凡社, 1994.
- 3) 岡田英弘:『歴史とは何か』, 文春新書 155, 文藝春秋, 2001.
- 4) 上田篤:『流民の都市とすまい』, 駸々堂, 1985.
- 5) イザベラ・バード, 高梨健吉訳:『日本奥地紀行』, 平凡社ライブラリー 329, 平凡社, 2000.